



## 設計概要

1) 伸縮桁長(626.6m)に対して橋脚高(平均36.0m)が小さいため、コンクリートのクリープや乾燥収縮により橋脚に発生する水平力を低減する工法が採用されています。

### 2枚壁式橋脚の採用

曲げ剛性を低減できるため、橋脚に作用する水平力を小さくできます。

### 水平変位調整工法

P 5 ~ P 7 間および P 10 ~ P 12 間の 4 径間に対して、桁連結直前に桁収縮方向と反対方向に強制変位 (最大変位:44.5mm、最大導入水平力:250tf) を与えています。

2) 終局時における外ケーブルの挙動や固有周期の異なる隣接する 2 橋の地震時の挙動を確認しています。

### 非線形解析プログラム(Say-Nap)による外ケーブル挙動解析

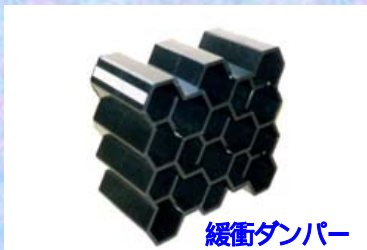
コンクリート、鉄筋および P C 鋼材の応力 - ひずみ関係より、断面剛性を逐次算定するファイバーモデル法による非線形解析プログラム(Say-Nap)を用いて、終局時の安全性を確認しています。

### 地震時の桁衝突解析

2 橋の桁間に GAP 要素を設けた非線形動的解析(Say-Nap 使用)を行い、桁衝突に対して、P 4 橋脚上掛け違い部桁間に衝突エネルギーを吸収する緩衝ダンパーを設置しています。



外ケーブル配置



緩衝ダンパー



## 工程表

	平成8年				平成9年								平成10年								平成11年											
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
詳細設計	■												■				■				■											
仮設工	■												■				■				■											
張出し施工	■												■				■				■											
支保工施工	■												■				■				■											
4径間部施工	■												■				■				■											
橋面工	■												■				■				■											

: 水平変位調整工法